

## 物語文指導の改善を目指して

新潟市立新潟小学校

教諭 畑 智

### 1 はじめに

県小教研の学習指導改善調査や全国学力調査の結果を見ると、情報の取り出しと解釈に課題があることが分かる。これは、今までの「読むこと」の指導において、多様な読みの観点を与えてこなかったこと、子供自身に読み方を自覚できるほどの指導ができていなかったことが原因として挙げられる。

そこで、これまでの物語文指導を振り返り、新たな試みを行うことが必要と考えた。本実践では、「やまなし」を教材として問題点について、指導の改善を図りたい。

### 2 問題の所在

「やまなし」について、「学習指導書」（光村図書 6年下 P40）に、次の記述がある。

「…（略 畑）これまでとは違った物語で、とにかく分らないことが多いのだから、これまでの勉強のように何かを求めようとする読み方（主題だとか主人公の気持ちだとか）をやめて、一つ一つの文や語句から、それぞれの児童が自分なりの自由な想像を広げていくように仕向けたい。」

上記の「分らないこと」とは、文章表現（オノマトペ、色彩語、比喩、造語）や、対比的に描かれている文章の構造などを指すものと考えられる。そして、そのようになっている原因は、次の一言に集約されると考える。

「やまなし」が、宮澤賢治の心象風景として描かれているから

この「分らないこと」＝「心象風景」は、「自分なりの自由な想像」を広げていくことによっては、解決されない。また、物語の読みが、個々の勝手な想像だけで終わってよいものだろうかという疑問も残る。

学習指導書の指導計画Ⅰ案を見てみる。以下の通りである。

- 1次 読みの視点を作り、自分なりの読み取りをまとめる。（2時間）
- 2次 2枚の幻灯をそれぞれ想像豊かに読み、その違いについて自分なりの考えをもつ。（3時間）
- 3次 資料「イーハトーヴの夢」を読み、作者の考えを理解する。（2時間）
- 4次 学習をまとめる。（1時間）

宮澤賢治の心象風景としてこの物語を読むとき、この計画には、二つの問題点があると考えられる。

一つは、学習活動の順序である。上記の計画では、「やまなし」を自分なりに読んだ後、「イーハトーヴの夢」で、宮澤賢治について学ぶ。そして、その後、「やまなし」には賢治の思想がどのように表されているかを確認する流れである。

しかし、この流れでは、最初の「やまなし」の読み取りは自分なりの読みでしかなく、賢治の思想や作品が書かれた背景と結びつけて理解することが難しい。また、「イーハトーヴの夢」を学習したあと、「やまなし」に戻って賢治の思想がどのように表されているかを確認したところで、それはあくまで確認でしかない。もちろん、この段階で、一つ一つの表現について検討していく読み取り方もある。しかし、指導計画では、「学習をまとめる」として、わずか1時間設定されているだけである。これでは、「やまなし」を賢治の心象風景として読み取ることは、困難である。

もう一つの問題点は、読みの視点である。学習指導書の計画では、5月と12月の違いについて考えをもたせることにより、「やまなし」を対比的にとらえさせている。しかし、それで終わっている。表現や構成の対比が押さえられても、それらが、賢治の心象風景の中で何を象徴しているのかという点までは問題としていない。結果として、「分らない」ことは、解決されないままに終わるのである。

そこで、本単元では、「やまなし」を宮澤賢治の心象風景として読み取らせるために、次の手立てを行う。

### ①「やまなし」の前に「イーハトーヴの夢」を位置付ける

特に、「やまなし」が書かれた背景に、賢治の妹「トシ」の死があることを中心に取り上げる。そうすることにより、宮澤賢治の死生観、「やまなし」が書かれた時期と妹「トシ」の死との重なりを理解した上で、「やまなし」の学習を進めることができると考える。

### ②表現を類比させ、象徴性を考えさせる

心象風景として読み取らせるためには、表現されている言葉が何を象徴しているのか、言葉の象徴性について検討する必要があると考える。

そのために、まず表現されている言葉のイメージを表出させ、それらの対比を問う。さらに、対比された言葉のイメージを類比させる。本時で言えば、対比された「色」のイメージの類比である。例えば、黒や赤、銀や鉄色などを類比としてとらえるのである。そうすることにより、色がもつイメージと場面の様子が重なり、何を象徴しているのかという色の象徴性に目が向くと考える。

このような手立てを取ることで、「やまなし」を宮澤賢治の心象風景として、読み取ることができると考え、本実践を行う。

## 3 単元名 「やまなし」を読み解こう（「やまなし」・光村6年下）

### 4 単元の目標

- 宮澤賢治の生涯を知るとともに、他の作品についても読んでみたいという意欲をもつ。〔関心・意欲・態度〕
- ◎ 「やまなし」を宮澤賢治の心象風景として読み取る。〔読むこと〕
- 「やまなし」について、学習した事柄を「学習のまとめ」として書きため、評論文にまとめる。〔書くこと〕

### 5 指導計画（全11時間）

- 第一次（1時間）…「やまなし」通読、初発の感想
- 第二次（2時間）…「イーハトーヴの夢」を通読し、宮澤賢治の生涯を知る。  
妹トシの死に焦点をあて、「やまなし」が書かれた時期の賢治について知る。  
詩「永訣の朝」を読む。
- 第三次（1時間）…語句、新出漢字の確認、疑問点の整理
- 第四次（1時間）…視点の検討、「はじめ、おわりの文」と「その間に書かれた物語」の構成を理解する。  
モチーフの確認
- 第五次（4時間）…対比をとらえる（色以外の対比・色の対比）  
色以外の対比をとらえる。  
色の対比をとらえ、それらを類比することにより心象風景の構造を理解する。  
やまなしの主題を考える。
- 第六次（2時間）…評論文にまとめる  
「やまなし」について書いた「学習のまとめ」を基に、評論文を書く。

### 6 実践の概要と考察

本単元第五次3時間目を中心に以下の働き掛けを行った。以下に働き掛けの意図と実際の様子から考察を述べる。

働き掛け1 かわせみの写真を提示し、事実と叙述の違いを知らせ、色のもつイメージに目を向かせる。

本文に以下の叙述がある。

「お父さん、今、おかしなものが来たよ。」

「どんなもんだ。」

「青くてね、光るんだよ。はじが、こんなに黒くとがっているの。それが来たら、お魚が上へ上っていったよ。」

「そいつの目が赤かったかい。」

「分からない。」

「ふうん。しかし、そいつは鳥だよ。かわせみというんだ。大丈夫だ。… (略)」

傍線部分、「そいつの目」とは、何であろうか。素直に読めば、「かわせみ」と考えられる。しかし、事実と異なる。「かわせみ」の目は、黒いのである。メスにいたっては、くちばしが赤い。この事実を提示する。

子供たちに疑問が生じるであろう。なぜ、赤と書いたのか。そこには、作者の意図があるはずである。ここで、次の発問をする。

かわせみの目を赤にする良さは何ですか。

この発問をすることにより、場面の様子と赤のもつイメージとを結びつけて、次のような反応が出るだろう。

- ・赤は、激しさやこわさというイメージがある。
- ・魚が殺される場面だから、赤という色が合っている。

このように、この働き掛けにより、子供たちは、色のもつイメージに着目する。また、場面と結びつけて考えることにより、色のもつ象徴性をとらえる足がかりにもなると考えていた。

#### 【実際の様子と考察】

子供たちは、かわせみの写真を見て、目の色を「赤」と認識した。目の色はあきらかに「黒」なのだが、目の周りほうすいオレンジに見えなくもなかった。解像度に問題があった。

そのために子供たちは、そこを叙述と一致している点と捉え、事実と叙述とのズレを認識することができなかった。子供たちは、叙述を正しいこととして素直に受け入れがちである。その価値観を崩すための資料には、あきらかに違いがわかるものを提示する必要があった。

また、「かわせみの目の色を赤にすることで良さはありますか。」

という発問は、意図が十分に伝わらなかった。子供たちからは、次のような発言が出てきた。

「目の周りに赤いものがある。(か)この父が、勘違いをした。」

「くちばしの色が赤く見えた。」

子供たちは、この発問を「かわせみの目が赤に見えた理由」と捉えていた。この発問は、「なぜ賢治は、目の色をわざと赤にしたのか」と、具体的に物語中での効果に目を向かせる発問にすべきであった。また、これらの発言が出てきたときに、問いと正対した発言でないことを指摘し、修正を加えることも必要だった。



かわせみの写真を提示する

働き掛け2 色のもつイメージを対比させる。

色を対比させるためには、色自体がもつイメージと、その色が使われている場面とを結びつけて考える必要がある。色についての叙述は以下の通りである。

五月 ・青白1回・青5回・銀1回・白4回・黄金3回・鉄色1回・黒3回・赤1回  
十二月 ・白1回・青白2回・黒2回・黄金1回・青1回・にじ1回

これらの色の対比を次のように整理する。

図1 色の対比

赤 鉄色 黒 銀 (白)		青白	黄金 白	五月
	B ←	青	青 → A	
(黒)		青	青白	白 黄金 にじ 黒
	B ←	青	青 → A	
		青		

【実際の様子と考察】

働き掛け2を行うと、子供たちは生活経験から、「赤」と対比する色を出してきた。運動会から「青」、紅白歌合戦から「白」というように。これは、その前の発問において、物語中における色の効果や作者の意図に十分に目を向かせることができていなかったことが原因と考えられる。

課題解決に向けて、段階的に発問を構成する場合、前段階の課題が十分に解決できていない状態で、次の課題を与えることの問題を物語っている。

しかし、ここで、物語中で色の使われ方に着目させる発問を行った。物語中においてプラスで使われている色と、マイナスで使われている色に着目させたのである。

これは、働き掛け3で行う予定であった、色の類比である。先に行ったわけであるが、子供たちは、この働き掛けにより、色をプラスとマイナスのイメージという観点で、分けていくことができた。



色の対比について話し合う

働き掛け3 色のイメージと場面の様子とを類比させる発問を行い、象徴しているものを一言で言い表させる。

色を対比させた後、象徴しているものを問う。図2のAとBである。ここで、次のように発問する。

図のAとBを一言で表すと、何と何と言えますか。

子供たちは、この発問により色のイメージを図2のように類比するであろう。そして、それぞれの色の集まりが象徴している言葉を考えさせる。具体的には、AとBはそれぞれ、「生と死」「喜びと悲しみ」など、対比された言葉として表されてくると考える。

図2 色の類比

赤 鉄色 黒 銀 (白)		青白	黄金 白	五月
B		青	青	A
(黒)		青	青白	白 黄金 にじ 黒
		青		

### 【実際の様子と考察】

働き掛け3の結果、「生と死」「平和と平和でないもの」という言葉に代表されるように、類比された色を象徴している言葉に置き換えられた子供は、82.3% (34名中28名) だった。また、残りの子供は、「やまなしとかわせみ」というように、物語中の具体的な言葉による置き換えはできていた。色を手掛かりに、対比された物語の構造に目を向けることはできていたのである。



色の象徴生を考える

これは、働き掛け2で、物語中の色がプラスとマイナスのイメージを伴って使われていることを押さえたことが有効に働いたためといえる。つまり、物語中の出来事だけから見るのではなく、色のプラス、マイナスというイメージを加えて物語の構造を見るからこそ、相反する2つのイメージを象徴した言葉として表現できたのだと考える。

さらに、次時では、「やまなし」と「永訣の朝」に使われている「青白」という言葉を手掛かりに、当時の賢治の心情にまで踏み込んで検討していく姿が見られた。ここで、「イーハトーヴの夢」で学習した賢治の生き方や考え方と結びつけて「やまなし」を賢治の心象風景として捉えることができたのである。

色はイメージを伴っている。それが物語でどのような意図で使われているか考えていくことは、作者である賢治の心象風景に迫るための有効な手立てであると考ええる。

## 7 おわりに

当校では、「問題の所在」方式の授業研究を行っている。本実践もその一つである。この「問題の所在」方式は、これまでの指導法の問題点を振り返り、改善を行っていくものである。「自分自身の指導法や先行実践などの問題点は何か」「それを改善するためには」という視点で授業を組み立てることは大変難しい。普段、問題点を自覚して授業を行っていないからである。

本実践の結果、指導法が直ちに改善されたとは考えていない。しかしながら、自覚的に指導法を振り返り、改善を図っていくこと、そして継続していくことが、授業改善の唯一の道であると考ええる。